

理研会報

発行 印教研理科研究部 事務局 成田市幸町948-1 成田小学校内

新たな年を迎えて

理科研究部長 武藤 喜正

年々歳々めぐり来る正月ですが元日を迎えると、昨日の今日でありながら、昨日とは違った新しい気持ちになるから不思議なものです。人生の歩みの中で、一つの区切りとして、節として、この正月を意義あるものと思いたいものです。

皆様は、どんな抱負をお持ちになられたでしょうか。それらを持ち寄って話し合い来年度の研究部の活動の指針とする事ができたならなんと考えています。昨年は、先生方の協力により多方面にその実践をあげることができました。

一、日常の授業実践を持ち寄って討議された教育研究集会は、会報一三五号に掲載されましたように、そのあり方について多くの問題が提起されながら一応の成果をあげることができました。県教研でも実績を認められ、全国教研に乘山小の小西先生を正

原稿募集について

たくさんの先生方から原稿が寄せられ、お陰様で、今年度は順調に理研会報が発行できました。特に、日常の実践をまとめていただき、読者にとって参考になることが多くあったと思います。さらに会報を身近なものにして、また、内容的に幅広いものにして

会員としておくりまします。二、本年度新しく計画された実験講習会は、各部会、地教委の協力を得て実施されました。「上血天秤をはじめて使った」という笑えない話もありましたが、より充実した研修会を計画していきたいものです。三、子どもの科学する心を、テーマで開かれた理科作品展は、会場校(田小)のご好意で二教室を借りてゆとりのある展示ができました。総出品二百八十余点と盛大でしたが、内容的にはもう一歩の感がありました。科学する子どもは、やはり、気づく教師、柔軟な思考のできる先生の指導が大切なのでしょうか。日々の指導実践に大きく期待しています。四、第二十回理科教育研究会は館

山市で開催されました。小林小嶋貝先生が、「自然の教材化」佐倉中加藤先生が「興味ある力学」習をすすめるために、それぞれ発表、参加会員から大きく評価されました。五、みんなの広場、交流の場としてのこの会報も一三七号です。継続は力なり。の信念で編集者もがんばってまいります。それを支えてくれるのは、やはり読んでくださる先生方です。みんなのための、みんなの会報を、より充実させるために投稿をお待ちしています。そうです。あの事、その事例をお寄せ下さい。(宛先は成田小、小山先生)本年度最後の三学期、足跡をふり返り、たしかめ、来る年度への橋渡しとしてお互いがんばろうではありませんか。厳冬ご健康に十分気を付けて。(一月十七日)



県教研勝浦集會 正会員(理科)の報告

県教研に参加して 旭中 小林 和年 四街道中 水野 勝浦で行われた県教研では、「地域の教材化」が四支部、その他四支部、計十二支部からの提案があった。

「地域の教材化」では、学校周辺の自然や素材をもとに、どの授業に取り入れていくのかという提案が多くみられ、市原支部からは、市原の地域の特長性をうまくとらえ、VTRによる自主番組を作り上げるなどの報告もあった。

東総支部からは、「海性プランクトン」イザサミの研究、夷隔支部からは豊富な自然を利用した

- 1. 虫まかってみよう 松戸根木内小 池田俊明
- 2. 問題意識を育て深めるにはどう指導したらよいか 東総日吉小 菅谷美和子
- 3. どの子にも楽しくよくわかる「てこ」の指導はどうあるべきか 長生萩原小 木島玲子
- 4. よくわかり児童に楽しさを抱かせる指導 相中 小林 和年
- 5. 観察コースの作成など、各々の場所をより有効に使用しようとする努力が多かった。
- 6. 伊藤支部の提案に対しては、三年間の研究の積み重ねという事に対して高い評価が得られた。他支部では一年間だけの研究が多い中で、三年計画の研究は異色であったと言える。
- 7. また、「電磁気学」やその他のレポートの中では、より個別化を求めた個人実験やワークシート方式の提案が多く、そのための装置の開発も見られた。
- 8. 全支部の提案が終わったあとの助言者からは、教材を作る事は教師の力を高める。

- 8. 愛情を育てる理科教育はどうあるべきか 夷隔行川小 照川由美子
- 9. わかり易い実験方法の追求 東葛風早北部小 福島久雄
- 10. 個別実験を行なわせる事により、全ての生徒が「やれる、(やらざるを得なくなる)ようになる。
- 11. 下位の子どもに対するワークシート方式は最低レベルを引き上げる点で大きな効果が期待できる。
- 12. 個別の話がなされた。また理科の評価に対する問題も会員の間では大きな話題になり、探求の過程も大事だが、必要最低限の学力(成績)をつける事にまず手をつけなければならないのではないかと、意見が出され、現実の生徒の状況を知らなければ、会員のうなずき合いの中で、終了した。

最近、地域に根ざした研究が多くなっていくところである。地域の素材を教材化するにあたっては、素材や児童の実態を十分把握するとして、特に指導の困難な指導法はどうあればよいか、実践を通して、研究を進めていかねればならないというようなことが話し合われた。また、助言者から、「まだ決定されていないが、低学年の理科はなくなるのでは?」だから低学年の理科の大切さを研究によって訴えてほしい」と言われた。

